

武蔵野

本社 江東
立川 武蔵野

武蔵野支局 〒180-0006
武蔵野市中町1の13の1 3F
電話 0422(51)3131
FAX 0422(51)3133
musasino@yomiuri.com
都内版編集室
電話03(3217)1465・1466
江東支局 電話03(3631)6116
立川支局 電話042(523)4477
ホームページ
www.yomiuri.co.jp/local/

購読は
0120-4343-81

【広告】読売Palette
03(6272)9027
【折込チラシ】 0120-03-4343
【読売旅行】 03(5550)0666

8月24日(水曜日)
旧 7月27日<先負>

通日 236
月齢 26.4 (正午)
東京標準
満潮 2.30
干潮 9.19
日出 5.07
日入 18.20
月出 1.40
月入 16.50
(中潮) 22.03

あすの暦

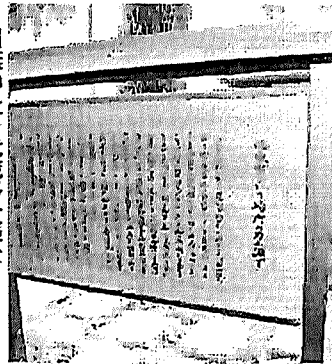


「故郷」の田園 心癒やす

文人の
武蔵野

五木寛之(1932年)が公開している「十九歳の日記(一九五二年)」の「十月一日」の項には「バスで新井薬師へ、更に西武線で田無へ」と記されています。当時まだ大学生だった五木は、池袋近くの10畳ほどの部屋に10人ほどで住み込んで専門紙の配達をしていました。池袋駅西口から出ているバスに乗って新井薬師前北口まで行き、そこから西武新宿線に乗り換え、田無

五木寛之 ③



田無神社と武蔵野大学が2014年に設置した看板。無名時代の五木寛之や村上龍らと田無神社のゆかりが記されている

を訪れたものと思われま。日記は「穂がもう黄金色の波を打っている。半年ぶりで眺める田園風景は何とも言えず胸にしむ。子供達の神輿があげ道を行く」と続きます。10月1日の田無と言えは、西

東京市住吉町に鎮座する尉殿神社(田無神社の兼務社)の例大祭です。何気ない記述ですが、前日の9月30日の日記には、金策に明け暮れる様子が赤裸々に綴られています。所持金が一円もなく、また売血かと思むものの、アルバイトの間が1時間増えます。臨時収入が入り、その日は「僕の誕生日」で「ハタチ」になったことを思い出したところで筆がおかれます。感傷を抑えた書き方ですが、20歳の誕生日を迎えた翌日、郷愁に誘われ「半年ぶり」に「田園風景」に触れたくなり、田無に足を運んだようです。誕生日の翌日には例大祭があることを憶えていたのかもしれない。「子供達の神輿」を目にして、その日暮ら

して荒んだ心も和んだことでしょう。バス代と電車賃さえ惜しいはずなのに再訪したのが田無でした。田無は、五木寛之にとって上京直後の彼を支えてくれた田無神社のある町であり、かりそめの故郷とも言うべき武蔵野でした。(敬称略。武蔵野大教授、むさし野文学館館長・土屋忍)

(岩波書店)



「日記」

「まえがき」には、「人は無意識に書きたくないことは書かず、語りたくないことは語らない存在」であり、「行間に注意ぶかく伏せられたものを読むことも、また読者の特権」だと記されています。様式化された創作とも言うべき小説家の「日記」の中に真実を探ってみませんか?